
ゴブリンと預言書

硬度2B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴブリンと預言書

【Nコード】

N9991J

【作者名】

硬度2B

【あらすじ】

ある日突然攫われてゴブリンにされてしまった俺は人間に戻るため、人間になれる伝説のアイテムを探す旅に出る。この物語には殺し合い等の過激な文章が投稿されるかもしれませんが。人の性格等を弄くることが出来る道具もあります。【DSソフト「アヴアロンコード」（マーベラスエンターテイメント）の要素を含みますが、世界観はオリジナルです。】

001・ゴミ溜め

臭い、汚い、空気が悪い。

ガラクタ、ゴミクズ、食べ残し。

視界の及ぶ限り足の踏み場さえない、人間の住む場所とは思えないこのゴミ溜めが今日から我が城である。

ああ、もう人間じゃないのか。

地面が近くて戸惑い、変わり果てた己の手足を見て落ち込む。

鏡があれば煤色の肌と鷲鼻、醜い容貌の二頭身の頭でっかちがうつるであろう。

今の俺はゴブリンであるのだから。

とにかく、掃除することが俺の異世界生活の第一歩であった。

あんまりである。

そもそも、なぜ俺はゴブリンになったのか。

簡単に説明するとこの世界の神のよそ一柱が他所の世界の俺を気に入り、自分の世界に引っ張り込んだ、というだけである。

しかし問題だったのが元の世界からこちらに引っ張り込むという無茶な？行為で、俺の肉体は消滅してしまったということだ。

肉体的には　もう無かったが　痛くも痒くも無かったが、重大な問題である。

かくして魂だけになった俺はこの神を非難した。

現実感が余りにも希薄だったことと、もうどうにでもなれという諦念からの自殺行為だった。

しかし俺の想像していた神様観は間違っていたようで、謝罪されてお詫びまでしてくれると約束してくれた。

当然新しい体を要求し、ついでになんでもできるようになりたいと厚かましくもお願いしたが、この神様は簡単に了承した。

問題は解決したところか、柵から落ちてきた牡丹餅まで頂いた俺は

その後、いくら言葉を口にしなくてもものを伝えられる神様が相手とはいえ、いやそんな神様が相手だからこそ要求とはもつと細かく伝えるべきだと後悔した。

神様が与えてくれた体は前述のようにゴブリンのものだったのだから。

神様が空の向こうへと去り、自分の体が人間のそれではないことに仰天して何度もお空に向かって叫んだがなんら返事は無く。

気付いたら岩山にぽっかりと口を開けている洞窟の前にいた。

ぼんやりしているうちに中の同胞たち　　言うまでもなくゴブリン

につかまり、

お前見ない顔だな、まあいいやいっしょに飲もうぜ、金が無い？
なら奢ってやるぜ

と勝手に話を進められて、酒場に連れ込まれた。

ビールのようなものを浴びるように飲みながら好き放題喋りたおした彼らがぐでぐでんに酔い潰れたのにはほっとしたが、これからどうすればいいのかと途方に暮れた。

酒場のおっさん　ドワーフらしい。身長はゴブリンと大して変わらなかったが、寸胴な背丈以外は人間っぽいので羨ましい　に、ここに住むなら適当な空き家に住んでいいと言われたときは彼が天使に見えたものである。

さて、洞窟の中に作られたこの町のことは後で詳しく説明するとして、数ある空き家の中で最も綺麗だったのがこの「ゴミ溜め」であり、今日から俺の家である。

思わず天井を仰ぎたくなるような現状と他人からは思われるだろうが、しかし、俺が与えられたのは汚い部屋と醜い体だけではない。神様に頼んだ「なんでもできるようになりたい」という願いもしっ

かり叶っていたのだ。

それが、今俺の手元にある「預言書」である。

預言書、というのはDSのソフト「アヴァロンコード」というゲームに出てくる主人公を導く本である。

主人公はこの本に滅びに近付いている世界の情報を取り込んでコードスキャンと言う、次の世界に何を残すかを選択していくのだ。

情報を取り込むと、それを構成する「コード」というものを自由に付けたり取ったりすることが出来るようになる。

そしてそれを取り出して使用することも可能なのである。

ついでに言うとゲームでは取り出す際にMPが使用されるので多用は禁物である。

例えば、この部屋にあった空きビンをコードスキャンすると、預言書の道具という項目に「自由の空きビン」というページが追加される。

自由の、というのは「自由」というコードが空きビンに付いているからである。試しに外してみると、空きビンはただの「空きビン」となる。

ちなみにコードが一切付いていないものは取り出すことができない。しかし「自由の空きビン」のようにコードさえ付いていればいつでもいくらでもMPの許す限り取り出すことが出来るのである。

なんでもできるようになりたいという願いとはちょっと違うような気がしなくもないが、願ったときに自分でこういうのを想像していたのだから、文句を言える立場じゃないし、むしろすでに理解しているシステムなのだからありがたいくらいである。

そして預言書には、「預言書の精霊」というのがいるはずなのだが……どうやらないようである。

彼らは普段朧になっただけで、呼び出せば強力な魔法で周囲に攻撃してくれる頼もしい存在なのだが、朧が1枚もないところを見ると期

待はできない。

なぜなら彼らがないということはどこかに封印されているということであり、そしてその「どこか」はこの預言書が本来あるべきところであるアヴァロンコードの世界のはずだからだ。

ここがアヴァロンコードの世界である、というなら話は別だが、その世界ではドワーフとゴブリンがいつしよに住んでいるなどありえない話だろうからその可能性は考慮しない。

しかし精霊がないからであろうか、それとも世界が違うからであろうか、はたまたゲームじゃないからだろうか、預言書の項目が多少変化している。

前述の道具は元々の「アイテム」だろうからほとんど変わらないと思うが、魔法という項目などは精霊の代わりとしか思えない。

項目を列挙すると

- 1 章 人物
- 2 章 魔物
- 3 章 武器
- 4 章 道具
- 5 章 魔法
- 6 章 植物
- 7 章 鉱物
- 8 章 文献
- 9 章 地図
- 10 章 世界地図
- 11 章 歴史

となっている。9章の地図はオートマップングしてくれる便利な機能なので、残っていて良かった。
なにせこの洞窟はやたらと入り組んでいるので、まだ来たばかり俺はすぐに迷子になる自信がある。
ちなみに人物の最初のページには俺が載っていた。

1章 人物

1節 主人公

HP：12000

MP：5000

技能：解毒Lv1、信仰Lv0 女神シュテラの寵愛

装備：ゴブリンの腰巻

主人公とは、笑えない表記である。

HPとMPはやたらと高いように見えるが比べるものがないのでよく分からない。

技能の解毒は、先ほどビールもどきを飲んだときに付いたのは覚えている。

飲んだ瞬間、

技能「解毒」を習得。

という表示が頭をよぎった。

頭がおかしくなったのかと思ったが、どうやらお茶目な演出だったようだ。

アヴァロンコードには武器の熟練度があったが、その拡張版のようである。

信仰に付いている女神の寵愛とやはどうやら俺をこの世界に連れ込んだあの神様の寵愛らしい。

詳細を見てみた。

女神シュテラの寵愛

HP×1.2 運×1.2 採掘×1.2

* 鉱石と宝石の女神シュテラの寵愛を受けている。

バッドステータスがなければそれでいい。

次は装備。

自由の服「ゴブリンの腰巻」

防御力+2

*貧相な襤褸切れ。

これはひどい。

そうだ、コードはどうなってるんだらう。

貧相ではあるが一応、防具として機能しているようなので武器の章を開く。

あつた。コードは「犬」と「自由」である。

犬の皮なのだろうか？

一応、全て外してみるとただの「服」になった。

ゴブリンの腰巻は上半身裸がデフォルトラしい。

服がほしいなあ。後で服屋でも探そう。

コードスキャンすればタダだし、自分で装備する分は取り出すためのMPもいらぬし、重量だとか大きさも預言書の持ち主に合わせ調節されるのですごく便利である。

ああ、しまった。預言書を眺めていて、部屋の掃除を忘れていた。

空きビンのように役に立つものがあるかもしれないのでまずは分別である。

掃除が終わったら生活を向上させるために預言書の内容を充実させなければいけない。

やることはたくさんあるのだ。

ゴブリンになつてしまったということは今忘れて、この世界で生きていく算段をつけなければならぬ。

そんな大層なことを考えていればきつとこの部屋の掃除なんてちっ

ぼけな障害である。

そう思い込んで、俺はこの世界での最初の敵に勝負を挑んだ。

001・ゴミ溜め(後書き)

誤字脱字、文法の間違い等見つけましたら報告お願いします。
ご意見、ご感想大歓迎。説明不足な部分を指摘された場合、加筆する
こともあります。

投稿	2010/02/24	14:00
改訂	2011/05/22	16:00

掃除を終えていくつかの役に立ちそうな道具をコードスキャンしてたら朝になっていた。

色々なことがあってハイな気分になっているのであるとか、眠くは無いが、朝日を見たら精神的に疲れた。

とりあえず、今日はコードスキャンで預言書を充実させたいので商店や露店を探そう。

コードスキャンは預言書を開いて対象に触れることが条件だが、なぜか誰からも文句を言われない、というか気付かれない。

周囲の者の認識を阻害するような機能が付いているのだろう。道具だけでなく、人、いやドワーフのコードスキャンもする。

昨夜はたくさん居たゴブリンがまるで見当たらないので疑問に思ったが、ドワーフのおばちゃん　立派な髭が生えていた　曰く、こんな朝から起きているゴブリンは徹夜でどんちゃん騒ぎしているヤツらぐらいだろうと教えてくれた。

道理でちよつと珍しそうな目で見られるわけである。町をぐるりと一周して家に到着。収穫は上々だ。

ドワーフの項目に今日会った34人分のプロフィールとコード。

武器の項目に武器屋で見た27種類の武器と防具。

日本ではこんな規模のことを町とは言わず、村と言う。

個人的なイメージから言わせて貰えば集落、とかキャンプとかそういったレベルである。

幸い、職人魂溢れるドワーフが中心となっている町なので物は豊富だ。

武器からコードを外して　ゲームではコードのストック枠は僅か4つだったが、この預言書はいくらでもストックできるようだ。素の状態に戻してみた。

武器の種類は先述したが27種、列挙すると

剣・大剣・小剣・刀・レイピア・棍棒・槌・杖・槍・斧・手裏剣・
ブーメラン・弓
兜・帽子・仮面・鎧・籠手・手袋・腰当・靴・服・衣・盾・外套・
首輪・指輪

といった具合だ。

ゲームでの組み合わせを思い出してコードを付けてみる。
服に炎のコードを2つ、正義と犬を1つずつ。
本の中の服に色が付く。

闘士の服

防御力+8 回避率+2%

*一般的な服。

「空きビン」に「自由」を貼り付けると「自由の空きビン」になる
というのを説明したと思うが、なぜ「炎」と「正義」、「犬」を付
けると「闘士」になるのか。

これがこのシステムの重要なところで複数のコードを貼り付けると
上位のコードに変化することがあるのだ。

例えば青の粘土と赤の粘土を混ぜ合わせれば紫色の粘土になる。こ
の上位のコードは紫色の粘土に当たるわけだ。

もちろんどんな組み合わせでもいいというわけではない。

「闘士の服」を例にすれば、ここから正義を外すと「炎の服」とな

る。これは炎と犬の組み合わせに上位のコードがないからであり、より数の多い炎が表示として優先されているだけである。

闘士の服は3種類のコードによる上位のコード ややこしいので以降 種コードと呼ぶ。 中には何種類のコードによるものかを示す数字を入れる。 闘士なら炎・正義・犬の3種コードだ だけあって中々の数値だ。 ゴブリンの腰巻とは大違いである。

ちなみに特定のコードによっては外見や中身、数値どころか能力まで変わることもある。

これはコードを付けたり外したり試行錯誤しても中々見つけれないだろう。

ゲーム中では石碑を見つけてコードスキャンして、パズルを解いてやっと手に入れることができるものである。

まあそれだけする価値がある桁違いの性能を持っているわけだが、残念なことにそこまで詳しく覚えていないので保留しておく。

あ、ゴブリンの腰巻は能力値的には難有りだがただの腰当とは見た目も全く違うのでこれも特別なコード こちらはメタライズコードとも呼ぶ だったようだ。 まあ特殊な能力もないので二度と使用しないだろう。

そして、能力はソレより高いが闘士の服はただの服に闘士というコードが付いているだけなので説明は変わらない。

さて、原作よりも遥かに多い装備やら道具をコードスキャンしていったせいで家についた頃には昼を過ぎていたらしい。

ゴブリンたちは眠そうに目を擦りながら町の奥へと消えていく。 昨日の酔っ払いから聞いた話では鉱石を掘りに行くのだという。

彼らは山を掘り、鉱石を得てそれをドワーフに買い取ってもらうことで日銭を稼いでいるようだ。

日給等のない完全な歩合制だが最低限の賃金など約束すればそれだけでいいやと一日ごろ寝するゴブリンを働かせるにはこれしかないのだ。 ちなみに宵越しの金を持たない江戸っ子なゴブリンに毎日働

いていれば貯金があつたりするんじゃないのという疑問は無意味である。粹なわけではない、明日のことを悩めるほどお頭が良くないようだ。

MPさえあれば「パン」に適当なコードを付けて食べることができるとし、服やら剣を売って金も稼げる俺には関係のない話である。二ト万歳。とか考えている俺もゴブリンの思考に染まりつつある。決して元からではない。

やっとこの世界で生活していける保障を得た俺は本を抱えて寝たが、碌な寝具もない場所で長時間寝たため体中が痛い。

バキボキと骨を鳴らしながら洞窟を出て夕焼けに染まる空を見上げる。

黄昏るなどゴ布林らしくない。俺らしくもない。

しかしそんならしくない行動をしてしまうほど途方に暮れているのだ。

生活はしていける、しかし体はゴ布林だ。

元の世界に戻れないというのはもう仕方のないことだ。あの神様が俺を嫌いにでもならない限り俺はここから逃れることができない。

そしてこの醜い姿にだっていつかは慣れてしまっただろうと思う。

しかしそれでいいのだろうか。人間であることを忘れてゴ布林として生きるとは難しくないだろうか。しかし俺はゴ布林になっただけから「俺は人間だ」という気持ち、いや自覚ができた。

人間が何かなんて高尚なものは哲学者に任せておけばいい。何かもわからないけど人間だ、という自覚が大切なんだと俺は思った。

ここはファンタジーな世界なんだから自分のことを人間だと思うゴ布林が一人ぐらいいてもいいじゃないか。

そう思って閃いた。

ファンタジーな世界。ならば人間になれるアイテムとかあってもいいんじゃないだろうか！

アイテムだけじゃない、そんな魔法とかがあるかもしれない。

モンスターが人間に化けて人間世界に紛れ込むなんてゲームでも小

説でもありきたりな話である。

人間に戻る、かもしれない可能性の種を見つけて俺は決意した。俺の目標は人間に戻ることに。これだけはこの先何があるかと達成する。

絶対に諦めない、わざとそれだけ独りごちて俺は部屋に引き返した。とにかく情報だ、ドワーフやゴブリンたちからそれを収集するため。の計画を練らなければなるまい。

酒場からは陽気なゴブリンたちの汚い歌声が聞こえる。

それはヘタクソではあったが、俺の口元を弛ませた。

ゴブリンの美点は過ぎたことにくよくよしない、馬鹿みたいにポジティブな思考だ。

002・黄昏ゴブリン（後書き）

作中で預言書のコードストック枠を撤廃したように物語にする上で邪魔なものを幾つか省いています。例えばコードの形等です。原作をプレイしている方には違和感を覚えるかもしれませんがご了承ください。

そしてオリジナル世界での二次創作の難しさに自分のセンスの無さを感じましたorz

投稿	2011/05/07	18:00
改訂	2011/05/22	16:00
	2011/12/21	15:00

人間になる、言うのは簡単だが実現への道は中々現れてくれそうにない。

あれから店じまいをしようとしているドワーフたちや酒場のマスター、酔い潰れていないゴブリンなどに話を聞いたが人間になる方法なんて聞いたこともないというのが彼らの回答だった。

ヒントの欠片もないことは半ば予想していたことである、この程度で挫けたりしない。

「ここいらで一番でかい町に行きたいんだが」

「…突拍子もないこと聞いて、次の質問はそれかい」

呆れ果てた視線を向けながらも一枚の羊皮紙を差し出してきた。

どうやら地図のようだが子供の落書きレベルである。

「この山を越えて森を抜けると王国一の穀倉地帯が広がっている。後は道なりに歩いていけば立派な城壁が見えるだろうよ。そこが王都だ、間違いなくここいらで一番でかい町だろうよ」

方位も書き込まれていない地図もどきながら指された特徴的な形の山には見覚えがある。さっきまで眺めていた、洞窟の正面に悠然とそびえる岩山だろう。

岩山の向こう側に描かれた森はかなり巨大なようで、それをどう抜けるか、山登りはどうするのか、課題はあるがとりあえず地図を頭に焼き付けた。

家に戻って預言書を開く。

10章の世界地図を眺めてさっきの地図に似た場所を探す。

岩山、森、穀倉地帯に城、ついでに洞窟。

これらがある場所は…ここか。

粗末ではあったが形にはほぼ間違いがない、現在位置を把握できたし目的地も定まった。

荷物はどうするべきか。

大体の物は預言書から取り出せるしMPにも十分すぎるほど余裕がある。

マスターの話ではモンスターの存在を簡単に確認できたし、その脅威性も預言書を持つ俺には十分対処できそうだった。

奇襲に耐えられるだけの防具と、とっさに振り回せる武器。

そして本を仕舞える靴と寒さを凌げて布団代わりになるマントかコートさえあれば問題ないだろう。

武具のコードの組み合わせを試行錯誤しながら俺のゴブリン生活2日目の夜は更けていった。

天気は生憎の曇り空だが、気温は不快感もなく旅立ちには悪くないだろう。

寝る前にコードを用意しておいた防具を装備する。

清浄な服「旅人の衣」

防御力+42 回避率+5%

自然回復+3%

*旅をするのに適した服。

4×4の16マスのコード枠を一杯使い、氷1+光1+銀9+正義1+自由1+魚1+鳥1+猫1で構成した。

メタライズコードを総当りで探すのは予想以上に大変な作業である。この「旅装」というコードも数値は良くないがこれを見つけるのにさえ数時間掛かっている。

とてつもない可能性を秘めながらも、その力を最大限引き出すのに

はどこか腰を落ち着けられる場所で何日も試行錯誤が必要だろう。

秘密の外套

防御力+13 回避率+3%

*一般的な外套。

外套はただの4種コードのみで構成されているが、あんまり変な形になって目立つのが良くないと思ったからだ。

コードは石11+金1+知恵2+虫2、なるべく固そうなコードを集めてはいるが、足りない。コード集めも急務である。

他にも靴や緊急時用のナイフもあるがこちらも良いメタライズコードが見つからず適当に固そうなコードで構成しただけで、ただの靴とナイフである。

後はアヴァロンコードでもお世話になったメタライズコードの「自由のクリームケーキ」（氷3+自由3）ができたのでこれを持って2日間使った我が家を出た。

相変わらず早朝はゴブリンの姿を見かけず、ドワーフたちが忙しそうにしている。

周りとは違い、ゆっくりと開店準備をしていた服屋のドワーフに話しかけた。

「おはよう服屋さん、カバンを求めているのだが、物々交換じゃダメかね？」

「…おめえは昨日の早起きゴブリンか。何持ってきたかは知らんがゴミならお断りだぞ」

いきなりゴミとはご挨拶だが、それだけゴブリンの持ち込みの評価が低いのか、舐められているのだろう。

本当ならカバンも預言書でコードスキャンして装備すればいいだけの話なのだが、如何せん昨日見て回った店には置いておらず、この町の住人としか会っていないせいも背負いカバンを使用している者もいなかった。

だからカバンを作ってもらうしかないのだが、俺は預言書に頼って働いてないし、カバンの代金を得るために何日足止めをくらうか分からぬ。

そこでこのクリームケーキである。気になって貰えなければ酒やパンもある。

過ぎた時間は短い、料理がよく言えば素朴、悪く言えばあまり味がないのは自らの舌でもって体感している。

それは現代日本人の感覚がそう思っているだけなのかもしれない、実は味音痴だったなんてオチもあるかもしれない。

ついでに言えばこっちでの食事はもっぱら酒場と預言書から出したものだけだったので、各家庭での料理はずっとレベルが高い可能性だつてある。

しかし文化レベルが少なくとも近代化されていないところを見ると料理のバラエティーが豊富にあつて、調味料もふんだんに使える可能性は高く無さそうだと判断した。

まあ実際にやってみればいいだけの話だ、断られればまた違うものを探せばいい。

ちなみにアイテム「ケーキ」は昨日見つけたパイのようなものか元である。試しに昨日のデザートにしてみたがあまり甘くなかった。

甘いものを最初に出してみたのはこれが理由である。

「これはクリームケーキというものなのだが、食べたことあるか？」
「む、むむう。ケーキというからには甘いものか？」

眉間に皺を寄せるのはいいが、その岩石のような顔でソレをすると凄まじい強面である。

それはともかくかなり興味を持たれているのは確からしい。後一押し。

「なんなら味見してもいいぞ」

「うむ、当然そうだ、味見味見」

何やら混乱状態なのか、片言である。

もしかしてアレなのか？

すごい弾力のクリームと説明文にあるだけあって、ごっつい指に掬われた際に「ぷるん」いや「ふわり」かな、その弾力を見せつけドワーフの親父を瞠目させた。

ぱくりと指を啜えた姿はあまり見たいものではないが、その顔は瞬く間に蕩けた。

うん、間違はなくこの親父は甘党だ。

こんな状態では話を聞いてくれそうにないのでもういっちょ衝撃を与えてこっちのペースにしてみよう。

預言書を取り出してケーキの項へ。自由のコードを外して「氷のケーキ」にする。イチゴが上にのっている定番のショートケーキに早変わりだ。

それを取り出して親父の目の前に晒した。

「今ならこんなケーキもあるが、いかがかね？ 俺が背負えるカバ

ンをひとつ用意してくれるだけでいいのだが」

ドワーフ親父はコクコクと頷きながらもケーキから視線を離さなかった。

いくつがあつた丈夫そうな背負いカバンの中からゴブリンの低い背丈に合うものを選んで、少し親父さんと話した。

というか、中々離してもらえなかった。

ショートケーキやクリームケーキは初めて見たらしくそれらがどれだけ素晴らしかった語り、そしてどこに行けば手に入れられるのか聞いてきた。

この世界にあるのかどうかさえ知らないのだからどうしたものか、仕方ないので知り合いに貰ったと誤魔化し、その知り合いはすでに遠くへ旅立ってしまったと適当なことを付け足しておく。

残念そうに落ち込むヒゲモジャ親父など見たくないの、「最後の」という前置詞付きでショートケーキをもうひとつあげてとつと退散させてもらった。

さてさて、準備を整えた俺は不安を感じながらもさっさと旅立つことにした。

うだうだしていると決意が鈍るのと、預言書があれば大抵何とかなるだろうという気楽さもある。

とにかく歩いて洞窟の町を出た。

2泊3日の短い滞在だったが去つてみると色々感慨深い。

生活が安定したらまた来て、今度は同胞ゴブリンどもと浴びるように酒を飲み交わしてみようか。

服屋の親父にまたケーキを持って行ってやろう、毎日穴掘り労働するのは勘弁だが一日ぐらい採掘作業に従事するのも有りかもしれない。せっかくの異世界ファンタジーな体験、色々やってみたい。

そう、この世界に来たこと自体が旅行みたいなもんだろう。気軽にはないし、命を失うかもしれない。

でもきつと辛いこと以上に楽しいことが待ち受けているに違いないのだ。

だがしかし何事もうまくいく保証などどこにもなく、困難は人生の友だちである。

俺の頭を悩ませる事態が歩いて数時間で発生した。

ナイフや棍棒を手に進路を塞ぐ我が同胞たち、対して道を塞がれた人間らしき武装した男たちと馬車。

そして木の陰からそれを眺める傍観者オレ。

自分が人間たちならゴブリンどもを蹴散らすなり逃げるなりしようと思えるだろう。

人間たちに出会ったゴブリンなら突然武器を構えたりしない。

当事者なら選択肢は限られるが、中途半端に選択肢が多くて困った。ゴブリンたちに加勢するのは論外、無闇に敵を作るなんて馬鹿げている。

人間たちに加勢するのもこれまた論外、同胞を裏切ってどうなるかさっぱり予想がつかない。彼らの頭では忘れてしまいかもしれないがハイリスクの可能性は否定できないのだ。

かといってゴブリンたちを説得できるかどうか。すでに戦闘態勢、こういうときは無理に止めてもこっちの身が危うくなるだけだろう。さてどうしたものか。

じりじりと間合いを詰めているが、ゴブリンたちは中々襲い掛からない。

何か警戒すべきものがあるのだろうか。

人間たちも頭数が少ない分、守勢に徹して馬車を守ろうとしているようだ。攻めていくとしたら形勢が逆転してからであろう。

この世界での両者の強さは分からないが大体そのように感じた。ぴゅうぴゅう、と後ろから風が吹いている。ふと自分の立っている少し先にまだ燻っている焚き火があることに気付いた。

ゴブリンたちが夜営でもしていたのであろうか、とりあえずそれを見て浮かんだひとつの案を脳内で採決した。

俺はこっさり預言書を取り出し、ソレらにコードを貼り付け始めた。

003・旅立ち(後書き)

	改訂	投稿
2011/12/21	同日	2011/05/22
15:00	16:00	15:00

004・丸焼き肉

炎を3つ、自由を3つ。コードをソレに貼り付けて、盛れるだけ取り出した。

怪しまれないための作業として剣にも炎を貼り付けて取り出し、消えそうな焚き火に振り下ろす。

燻っていた火は勢いを取り戻し、白い煙と枯れ枝とソレが焼ける匂いが風下、対峙するゴブリンと人間たちの方へと流れた。

ゴブリンたちの目が勢いよくこちらを向いた。

チャンスだろくに、新たな危険がないか確かめようとしたのが、人間たちも視線をこちらに寄越して固まった。

彼らが見ているのは俺だろうか、それとも粗末な木皿に山のように盛られた「丸焼き肉」だろうか。

「おや、同胞たちよ。暇ならこっちで一緒にどうだい。俺ひとりじやさすがに食いきれなくてね」

丸焼き肉を火にかざしながら、俺はそれだけ言って視線を肉に戻した。

自由の肉「丸焼き肉」

HP回復：11

* 肉は丸ごと焼いて食べるのが王道。

アツアツの丸焼き肉にかじりつくワイルドさがたまらない。

ワイルドはいいが何の肉なのか説明してほしい。

しかしうまそうな匂いだし、と齧り付く。

「うん、うまい」

思わず独りごちた。たぶん豚肉、かな？

視線をゴブリンたちに戻すと、彼らはパツと武器をその場に落とすて一目散に駆けてくる。

彼らは辿り着くと走っている勢いそのまま肉を両手に取り、齧り付く。そして地べたや動物の皮の敷物に腰を落ち着けて食いながら喋る。

「よう兄弟、肉わりいな！」

「酒まだ残ってたっけか？」

「うめえうめえ」

最早、人間たちなど眼中にないようだ。

俺がもうこれで腹いっぱい、後は好きにしてくれと言つと、太っ腹！お大尽！とか気のいいことを言いながらどんちゃん騒ぎを始めた。彼らは多分山賊かそれに類する生活をしているのだろう。

しかし彼らはゴブリンで、欲望に忠実だ。

後ろには武器を持っている人間がいるのにさすがに暢気過ぎると思うが、楽な方に流されるゴブリンはやっぱり「貰えるもんなら貰つとく」し、それが自分たちの欲望を刺激するならなおさらだ。

彼らが満腹だったら成功しなかつただろう、策が成つてから気付いて今度から注意せねばと戒める。

さて、お次はゴブリンたちのテキストさに呆けている人間たちだ。

しかしそちらに近寄ってくる俺に警戒したのか、武器をしっかりと構えなおして睨んでくる。

ちよつと怖いが彼らはゴブリンを討伐しに来たというわけではないだろう。

馬車からこちらを窺う中年の男は軍人には見えない。武装した男たちも装備が統一されているわけでもなく、共通の紋章とかそういう類のものは見受けられない。

恐らく、いや間違はなく商人とその護衛だろう。

ならばその本来の仕事を思い出してくれればここで無為な時間を過

「ごすことはないだろう。」

「俺は先を急ぐが、お前さんたちはこんなところで油を売っていていいのかね？」

それだけ言つてとつと彼らが歩いていった道へと出る。

預言書を開いて地図を確認、ショートカットしたのだがやっぱり野山を掻き分けるのは無意味な体力を使う。

人間だったときよりはるかに頑丈な体で、体力もあるが無駄に使つてもしょうがない。

道なりに進んでいると後方から金属音と馬の嘶きが聞こえた。

振り向くと彼らは抜いていた武器を仕舞っていた。

「どうやら俺の「お喋り」は効果あつたようだ。」

まったく、結構なことである。

もつとうまくやれば人間と仲良くなり、この世界の知識を得ることができたであろうか。

いや、ifの話をしてもし方の無いことだということとは理解しているつもりではあるが、あまり口がうまくない上に、この世界の常識さえない俺には自己採点をつけることさえままならないのだ。

あれから随分歩いた。

そして「商人と愉快的仲間たち（俺視点）」に追いつかれた。悲しい歩幅である。

突然斬りかかられたりやしなやかとこちらはかなり緊張していたのだが、奇妙な目で見られるだけで特に会話もなく横に並ばれた。

先ほどのことでお礼ぐらい言つてもいいんじゃないかと内心で勝手に憤慨してみたが脳内裁判にはすぐに飽きたので鼻歌でも歌いながら、なんとなく気まずい空気に知らんぷりをする。

やっぱり演歌よな。

余計人間たちの視線を浴びることになったような気がするがそんなものは「マボロシー！」である。

最近のテレビにはよく変なものたちが映っていたがそれも幻とした

い。

俺がこっちに来て3日目、向こうでは俺の失踪がどう扱われているのか、どうとも扱われていないのか、ちょっと気になる。

テレビとかで写真を使うなら大学一年の頃に撮ったものを使ってほしいなあ。

あの頃の写真好いいつも写真写りが悪い俺にしてはよく撮れていたからな。

「おいゴブリン」

わざと思考を逸らしていたら本格的に脱線した。思考を読むとかそういうのはないだろうが隣に人がいたと考えるとちよつと恥ずかしい。

そしてもっと警戒しないと。ここは異世界、俺はゴブリンなのだから。

「なんだ人間」

目が合ったのは護衛（仮）の中でも一等若そうな奴だ。元の世界で言う西洋や中東系の彫りの深い顔ばかりなので年齢がまるで予想つかないが、ガキっぽいという印象を受けた。

決して「おいゴブリン」と呼ばれた腹いせではない。

「……先ほどの肉、一体どこから運んだのですかな？」

若造は何故か顔を引き攣らせながら黙ってしまったので、横にいた髭のおっさんが質問をしてきた。

目の前に肉か酒があれば人間なんて襲ってる場合じゃねえ！ そんなゴブリンの気質は知っているのだろう、俺が用意したということには毛ほどの疑問もなさそうだった。

「人間には魔法使いはおらんのかね？」

「いえ、ありますがね……あれは魔法なのですか？」

どうやら魔法や魔法使いは存在するらしい。

魔法については預言書で存在だけは確実視していたからどうということはないが、元の世界みたいに半ば架空のものという扱いや他にも過去のもの扱いされたりはしてなさそうだとおっさんの態度で判

断した。

「人間にはああいう魔法がないのかね？」

「私はあまり詳しくありませんが、聞いたことが無いですなあ」

ふーむと適当な返答で誤魔化しながら若造を見る。こちらのことなど興味ありませんとすまし顔である。逆にわざとらしいが。

「ところで彼は何故怒っているのかね？」

「ああ、自分で喧嘩を売りながら情けない奴でしてね。どうぞお気になさらず。よい旅を」

「ああ、そちらこそよい旅を」

如才ないおっさんは隣で魚みたいに口をパクパクさせている若造を連れてだいぶ先行した馬車の方へと駆け足で向かった。

それにしても恨めしいのはゴブリンの短足である。

体力がある分、あまり予定は狂っていないが、由々しき事態である。予定より増えそうな野宿をいかにしてローリスクにするか、気軽に旅を始めた阿呆は考えなければならぬのである。

004・丸焼き肉（後書き）

預言書で何ができるのかを説明しながら、オリジナルな世界の解説もする。

これはマゾい。

投稿 2011/12/21 17:00

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9991j/>

ゴブリンと預言書

2011年12月21日17時49分発行